

---

# 東方幻創録別稿      好々日常譚

鳥語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幻創録別稿

好々日常譚

### 【Nコード】

N2437T

### 【作者名】

鳥語

### 【あらすじ】

とある商売人。好々爺・・・道楽者。どういい代えてもいいような幻想郷で暮らす人間『ゲンさん』の日常譚。

時折出会う事件ともいえない出来事。ただただ緩く流れていく毎日のこと。決して為にはなりません。どうぞ、時間を無駄にするつもりで・・・そんな感じの日記帳のようなもの。読んでも読まなくても変わりはありません。

軽い感じでのんびりとを目指して、その日々の記録を綴ります。

番外・・・別物としてもいいくらいですので、暇つぶし程度にどうぞ。

## 自己紹介的プロローグ（前書き）

・注意

文体が違う。

かけて1〜2時間のもの。

推敲ほとんど見直しのみ。

勢いのみで書いています。

クオリティは電車通学ケータイでくらのものです。

## 自己紹介的プロローグ

それでは、語り始めることにしよう。

幕も演出もなく、軽い調子で始まるくらいが丁度いい。

まず、語り手である俺は……いや、そういう語り口で語るのは、なんとなく心地が悪いが。

日常いつも使用しているものとはいえ、これは文字で語る物語。『私』、もしくは『僕』といった方が、何かと語りやすく、リズムが良いように感じるものだ。

だから、この物語を語るときには、一人称は『私』に統一しておくことにしよう。

この方が何かと便利で、しかも何となく大人っぽく感じられる（実際は、そんなこというまでもない年寄りには違いないのだが）。気になるなら適宜脳内で変換するか、もうこんなもの読まないと投げ捨ててしまっても構わない。

少し傷つくかもしれないが、これはただの自分語り。とるに足らない日常譚。

『私』にとっては大事なことで、他の人間にとっては何の価値もないただの日記帳に過ぎないのだから。

まあ。

そんなこんなと色々な諸事情や言い訳を語った所で、多少格好のつけようとしていた導入部も終わる。

本編の始まりということ。

おっと、その前に自己紹介を書き足しておかねばならないか（わざとらしいか）。

では。

失礼ながら。

これは、通称『ゲン』。

ゲンさんやらゲン爺とやら呼ばれる道楽者の物語。

人里の好好爺が語る、ある商売の日常録。

お気に召すかどうかはわからないが、まあ、暇潰し程度に付き合ってくれればいい。

筆者本人だって、そんな気持ちなのだから、ね。

ほら、これで余計に道楽らしくなった。

ハードルは出来るだけ下げておく方が楽ということ。

では、始まり始まり。

・・・こんなものでよかっただろうか？

## 自己紹介的プロローグ（後書き）

勢いでしか書いていません。

内容は限りなく薄いです。

けど、一日一日ってこんな感じだよなって感じですよ。

あんまりに微妙になってきたら消すかもしれません。



## 人里でのこと（前書き）

とりあえずこんな感じというところで

## 人里でのこと

人里での商売。

色々規則こそあるが、結局の所、実はそれほど難しいものではないといっておこう。

幻想郷。

こんな閉鎖された土地で、しかも、さらに小さな・・・一つしか存在しない人里のこと。

元より、こんな場所に競争心など存在しない。ほとんどの者が、代々続く自らの家業を継ぎ、それぞれのそのままの形で役割を果たしている。

取れ高や採算、その年の状況で多少上下はありながらも、ある程一定しているのでそこまでの激変もなく。良いものは高く。悪いものは安く売られている。ただ、それだけだ。

詐欺やら何かを働こうとする者も、そうそう大っぴらに動けるわけがない。そもそも、信用を失えば、それだけで客はいなくなる・・・  
・・・身の破滅に違いないのだから。

閉鎖された空間で孤立することほど非生産的なことはない。商売人ならまずわきまえていることだろう。

まあ。

一応、ゼロではないのが、多少商売っ気を感じさせる部分ではあるのだが。

「・・・ふむ」

とまあ、そんなことをつらつらと考えながら、込み上げる欠伸を噛み殺す。

目の前には、人々犇めく里の市場。

そのきざ端で筵を拡げ、折り畳み式の椅子に身を預け、数少ない客を待っているのが、『私』・・・こと『ゲンさん』である。

これだけの人間がいる中で、さっぱり人がこないのは、場が悪いのか。ものが悪いのか。はたまた、店主の愛想が悪いのか。

まあ、そう焦って商売する気はないのだから、それはどうでもいい。

「ふああ・・・」

問題はこの眠気だ。

流石に、商品を放っぽって眠りに入るほど気は大きくはない。いくら治安がいいとはいえ、それなりに窃盗を行うものなどもいるのだ。

そう。

とくに、相手がそれを多少なりとも認めている場合に限っては遠慮なんて絶対しない人物もいる。

「ねえ、霧雨のお嬢さん」

「お、何だ寝てなかったのか」

静かに指を伸ばし、商品に触れようとしていた手を引っ込める少女。鰐広の黒帽子にエプロンドレスを着込み、片手には箒をもった古典

的な白黒魔女ルックのそれは……数少ない家業を継がない組の（未来はどうかわからないが）、普通の魔法使い『霧雨 魔理沙』である（別名白黒）。

「お代はちゃんと払ってくださいよ」

一応仕入れもしている商品なのだから。

「失礼なこというぜ。私はガラクタが落ちているから有効利用してやろうかと思っただけだ」

帽子の端を持ち上げて悪びれなく笑う。

「一応、商品なんでね。拾われちゃ困ります。置き引きは言うまでもなく泥棒ですよ」

「おお？ 私は泥棒なんてしたことないぜ」

「どっかの図書館から返却通知預かってますよ」

「ほらな、借りてるだけだ。多少遅れるのはちよつとのんびり屋なせいだ」

そんなふうになにの憂いも見せずに笑えるのはなかなか豪胆なことだ。見ていていつそ気分がいい。

「死ぬまで借りる」といった宣言も案外本気でいつているのかもしれない。確かに、妖怪や魔法使いにとっては、人間の寿命なんてたかが数年といった程度の感覚だ。文句はいいこそ、それで話し相手（もしくは絶好の暇潰し相手）を失うのも惜しいといったところ。思考を硬化させがちな長生の中、新しい風も（たとえ無理矢理開けた風穴からだとしても）必要なものである。

まあ、これは詩的（私的）な考えで、あの図書館の主は本気で困っているようにも思えるが……司書的使用魔も、本棚（本で

すらない）をバラけさせられて仕事が終わらないと嘆いていた。

「・・・・・・・・やっぱり、ちゃんと返してあげてくださいよ」

「気が向いたらな」

そんな言葉を意にも関せず、商品を弄り回す。もう、さっきの話は終わってしまったということらしい。

残念だが、私は取り立てには向いていないということなのだろう。まあ、別に本気でもなかったのだが・・・。

「お、何だこの人形は？」

弄り回していた商品の中から、その手癖の悪い白黒が気になるものを見つけたらしい。

「お、流石にお目が高いですね。そいつは限定品ですよ」

限定品、といったところでその目に星が輝いた。そのまま素直にお買い上げとはいかないだろうが・・・まあ、多少警戒しながら説明を続ける。

「河童謹製の技術をふんだんに使い、とある人間がさらに改良を加えて実用化した試作品第一号」

「ほう・・・・・・・・」

ぐるぐると人形を回転させ、興味深そうに観察する様子ににんまりと口端を持ち上げる。

これが売れば、河童の技術局に資金が入り、さらなる研究も可能になるのだ。

科学の発展のために踏ん張りどころである。

「今ならモニタリングの手伝いを条件として大幅値下げですよ」  
「なるほど……なかなか面白そうだ」

俄然興味が沸いたという表情を浮かべた相手に対し、さらに  
と特典を重ねていく。

身を切るような思いだが、お客さんのためには（引いては利益のためには）仕方ない。上手く相手をのせて、商品を買う方向へと誘導していく。

そして。

あと一歩というところまで商談が進んだ所で、この白黒の魔法使いはほんの初歩的なこと（最初に聞いておくべきこと）を口にした。

「そういえば、これって一体何に使うんだ？」

「おや、わかってなかったんですか？」

今さらの質問に思わず言葉返してしまう。

だがしかし、商品の説明というのも商人の義務。しっかりとそれを果たすのもまた肝要なことである。別に、わざと説明しなかったわけじゃない（ただ聞かれなかったただけだ）。

「この人形はプラモデルといって、外の世界にある嗜好品を元として造り出した逸品です。元々のモデルに対して、それを何十、何百分の一という形にそれを縮小し、どれだけ本物に近づけられるかという限界に挑んでいます」

「ふむふむ」

「この人形の凄いところは、元々のモデル……その形どころか部品や装飾、中身に至るまでを模し、簡易的な材料を使っているとはいえその稼働域や活動状態まで再現できるという優れものです」

「なるほどな・・・小さくなった萃香のみたいなもんか」

何やら納得したようにうんうんと頷く白黒。

（全然違うような気もするが）どうやら理解してくれたらしい。

「・・・で、どうやったら動くんだ？」

「動きません」

「は？」

「動きません」

心底意外というように今度は目を白黒とさせている白黒。

「動力なんて積んでませんし、あくまで簡易品。再現のみで本物みたいにはいきません」

「じゃあ何の意味があるんだ？」

「嗜好品っていったでしょう？それを組み立て、どれだけ現実通りに近づけられるか。その極限目指すという遊びでもあるんですよ」

何種類かを使つての場面再現というものもある。その場合は舞台や演出などの小

道具も必要なのだが・・・生憎、まだまだ試行段階。そこまでの商品化には至っていない。

これから先に期待だ。

「まあ、本物は造れないからせめて、簡易的な模型を作つて楽しもうって意図もあるんですけどね」

「なんだ・・・つまりは本当にただの人形とかわりないんだな」

失望したように呟かれる。

こっちとしては、そっちが勝手に勘違いしただけだとか、それは技

術者に失礼だとか、文句いっても良い気がするが……まあ、実際こういうことに興味がないものからすればまったく意味のないものだ。

別に拘る必要もない（ただ実入りが減るだけだ）。

「じゃあいらないんですか？」

「ただならもうぜ」

「ならあげません」

端的に告げて立ち上がる。

「おいおいもう店じまいか？」

「ええ、もう客なんて来やしないでしょうしね」

商品を丁寧に包み込み、荷物として一つに纏めていく。

こーりんのところと変わらないぜ、なんていう呟きが聞こえてきたが、それには断固抗議することになろう。

自分は道楽で商売をしているのだ。売れても売れなくてもどうでもいい。

一応、仕事として店を構えているあちらとは全然違うのだ。

それに私は客を騙しもぼったくりもしないし、ちゃんと使い方まで説明する。

悪い商売はしない。

「趣味でやってる時点で一緒だ」

「冷やかしはさっさと帰ってくれ」

もう接客モードは終了。

適当な態度で白黒を追い払おうとする、が……



「そろそろ昼飯だ。あつちに新しい飯屋ができたらしいぜ」

「……また奢らせるつもりか？」

「おお、いいのか？ ゴチになります、だぜ」

はあ、と一息を吐いて、ひょいと荷袋を持ち上げた。

「……一品だけですよ」

「大丈夫。あそこは鍋の店だ」

そんな、ものつ淒い鮮やかに言い放つモノクロにいくつか荷物を押し付けて、新規開店だという店へと歩を進めた。

財布は薄くなるばかりである。

鍋はけっこう美味しかった。

## 人里でのこと（後書き）

軽く書きたかった。  
それだけです。

一人でも楽しんでくれたならいいなあ・・・

読了ありがとうございましたー

## 竹林でのこと（前書き）

書いていたのに更新するのを忘れてました。

## 竹林のこと

竹というのは成長が早い。

今朝は土の中にあつた筈が昼過ぎにはそこからもう頭を出しているなど、日進月歩どころか秒分毎に上を目指して躍進中といったところだ。成長株だなんていうまでもない。

昨日はサラ地だった場所が、今日は日もささないほどの状態に姿を変えているなんてさらにあることで　いや、やっぱりここ（幻想郷）だけのこともかもしれないが。

「相変わらずここは道に迷いやすいですねー・・・案内なしじゃどうしようもないですよ」

「何いつてんのよ・・・まっすぐに人を見つけておいて」

「案内人を見つけれなきゃ道がわからないですから」

「いや、まあそうだけど・・・私の所までくるための道は？」

何やら不満そうに呻く案内人・・・自称・健康マニアの焼き鳥屋。  
藤原妹紅。

「そりゃあ慣れた道ですし」

「だから・・・！」

「なんです？」

頭を抱え、どこか疲れたように嘆息をつかれた（洒落ではない）。  
どうしてなのかまったくわけがわからない。

「・・・いいや、もう」

不思議そうに首を傾げたこちらにさらに肩を落とす焼き鳥屋。  
まあ、いろいろあるのだろうと察して「そうですか」と端的に返しておく。相手のことを考えて慮るというのも大人のマナーというものだ。

「さて、からかうのはこれくらいにして・・・」

「やっぱりからかったのかよ！」

しまった。つい本音が。

地の文でまで自分を誤魔化し続けてきたというのに。こんな失敗をしてしまうなんて少しゆるみすぎているのかもしれない。平和な日々に浸かりすぎた兵士のように力を失ってしまい、いつか命を危険に曝す（悪戯がばれた的なことで）。

「ま、いいか」

「よくない！！」

激情任せて叫ぶ焼き鳥屋。

心なしか、そのバックには炎が踊っているように見え、なかなかど迫力な演出である。というか暑い。

「どうしたんですか？ まだまだ灯りは必要ないですよ」

「ああもうつ！」

ガシガシと髪を掻きむしるようにしてその感情を伝える。頭皮が傷むのが心配だが・・・まあ蓬萊人だし大丈夫だろう。

「・・・ホントにつ・・・お前は昔からそうだよ・・・」

「こらこら、歳上にお前だなんてはしたない」

「・・・本気で燃やしてやろうか」

そろそろ沸点を超えてしまいそんな声に流石に口を閉じる。あんま

りやり過ぎてはいけない（こういうのは加減が大事だ）。何か当たり障りのない会話で気を逸らしてしまうのが吉。

ということだ

「そっさいや、竹で炊くご飯は美味しいですね」

「どんな話の逸らせ方だ！」

むう。

チヨイスを失敗しただろうか。大体こういうときは食べ物話をすれば気が紛れるのだが（五里霧中にしてしまっているだけの様な気もする）。

と。

そんなやり取りをしている間に目的地は間近まで近づいていた。

辺りにちらほらと見える白いのはここに暮らす住人の一部　妖怪  
兎達。こちらに気づいていながら何の対応もしないのは、火が用心  
の危険人物がいるからか……。それとも、自分達の親玉に命  
令でもうけているのか。

まあ、ある意味信用されてはいるのだろう。

「む……」

「どうかしたのか？」

「いえ」

人差し指を伸ばした先にあるのは、道の中心にある丸い跡……。不  
自然に色が変わった地面。

「・・・またあの悪戯ウサギか」  
「ですかねえ」

つかつかと歩み寄る妹紅は・・・何度かそれに引つ掛かっているのか、そこに近づくのにも警戒しながら進んでいく（確かにあのウサギなら二重、三重トラップもお手のものだろう。引つ掛けの可能性もある）。

そして、無事その場所へとたどり着き、それに触れてみようとした瞬間。

「・・・もう!!」  
「わわ!？」

飛び出してきた大声にびっくりして飛び退いた。  
見れば、その色の変わった地面から突きだしている肌色の物体・・・  
・・・何かの腕が見えた。

「おや、先客がいましたか」

落とし穴の縁にその手をかけて、上に被せられていたカモフラージュの土を剥ぎ取りながら現れる姿。

二本の白い耳に真っ赤な目の兎。  
悪戯をする方ではなく、もっぱらされる方の兎である、鈴仙・優曇華院・イナバである。今日も今日とて元気に手を焼かされているらしい。

ぶつぶつと「あの子は」だとか、「まったく」だとか文句をいいながら服についた土を払い落としている様が、妙に手馴れたものとなっている・・・苦勞しているのだろう。

「多分、落とし穴に引っ掛けられて気絶し、そのまま上から元の状態に戻された。あわよくば、さらに誰かが引っ掛かって追撃になれば面白いなー、なんて感じですかね」

「なんだよ・・・その妙に具体的な推理」

少々驚いたのだろう。自分の近くまで飛び退いて戻ってきていた妹紅が呆れ顔をする。

「あら、あなたたち・・・」

そんなやり取りに気づいたのか。その月出身の兎が衣服についた汚れを払っていた手をとめてこちらに近づいてきた。

「・・・・・・あの薬師に用があるんだってさ。私はただの案内。あとは任せる」

ぱつと、流れるように喋ったかと思うと踵を返して立ち去ろうとする妹紅。

「ちよつと待つてください」とその背中を呼び止めて、荷物を探り、一つの包みを投げ渡す。

「どうせろくなもの食べてないんだろって慧音さんから」  
「・・・・・・ああ」

ぶっきらぼうに片手を上げて立ち去る背中に「帰りに器とりによりますから」と呼び掛けて見送った。

まったく誰に似たかもわからないが、なかなか素直じゃない（多分、前に鈴仙がいる。ひいてはあの姫に伝わるかもしれないといったところもあるのだろっけれども）。



「・・・素直じゃないわねえ」

まあ、ばれていては仕方がないのだが・・・というより、その姫さんとあれだけ子供っぽく喧嘩しあっているのだ。今更のことなのだろう。

「わかりやすいのも難儀なもんですねえ」

ひねくれているようにみせて、素直なところは妙に素直だ。元々の性根がまっすぐなのだから仕方がない（多少、それが過ぎているくらいもあつたくらいだ）。

「さて、いきますか。兎のお嬢さん」

「・・・出迎えはてゐの役目だったはずなんだけどね」

もういいわ、と何処か疲れたように漏らす。こちらもやはり少々真面目すぎる苦労人なのだろう。人間（妖怪含め）、ある程度ひねくれていた方が生きやすいだろうに。

「・・・まあ、それじゃあつまらないですか」

「ん・・・何かいいました？」

「いいえー」

視界の隅。

鈴泉からは見えない位置の草むらに隠れる薄桃色の姿を見ながら、にこりと笑い返した。

不思議そうに首を傾げるそのピュアさ（引っ掛りやすさ）に心底同情するが、これは己で乗り越えなければならぬ試練である（兎の大将の座を賭けた）。

先達は、それを考えてあえて厳しい態度で彼女に接しているのだ・・・そんなわけではないか。

「どうしたんです？　いきますよ」

こちらを先導する兎。

さてさて、この兎はこの先に存在する狩人の罠から逃れることが出来るのか（もしくは、いくつ引つ掛らないですむのか）。染みこんだ軍隊規律から抜け出した野生の本能に期待である。

「なんてね」

そんなしょうもないことを考えながら、その導きの後ろを歩いていく。

何のこともない、いつもの日常だ。

## 竹林のこと（後書き）

のほほんと。

のんびりするのはいいことです。

当の本人はどうかわかりませんが

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2437t/>

---

東方幻創録別稿      好々日常譚

2011年10月7日11時06分発行